文芸研ブックレット 23

意味の意味

講師　西郷竹彦

二〇〇三年一〇月一五日　牛窓総合福祉センター

二〇〇三年一二月
文芸研　編集

意味の意味

講師　西郷竹彦

二〇〇三年一〇月一五日　牛窓総合福祉センター

「意味の意味」というのは、実はこういう題名の本があるのです。有名な本です。意味論のさきがけとなった、とでも言いましょうか。オグデンとリチャーズという二人の人の共著ですけども、意味とはどういうことかということを説いた本です。再三いろんな人の訳で出て、つい二年ほど前にもでましたが。

わけと意味

今日はなぜ意味ということをとりあげたかと言いますと、最近教育の世界でも、私どもの提案によって、教育の現場でも小学校の段階から意味ということをもっとちゃんと教え学ばせていこうというふうな運動が始まりました。今年の広島大会でも、その前の山口大会でも、このことを中心にして研究が展開されたわけです。

なぜ今、意味ということを重視しているのかと言いますと、みなさん方も小学校から、中学校、高校あるいは大学と授業や講義を受けて来られて、いろんな場面で、理科や社会や国語のなかでも教師から「何々についてわけを考えなさい」という問いを出されたことはしょっちゅうあったと思うんです。また、「わけを考えなさい」というと何を考えればいいのかということもだいたい納得していて、「これはこういうことだからです」と答える。わけをたずねるときは「なぜ」「どうして」とききますね。それに対して答えるときは「何々だからです」というふうに答える。というふうに問う方も答える方もだいたいは「わけ」ということを納得していて、そのうえでやりとりしていたと思います。

ところが「意味を考えなさい」「これこれこういうことについての意味を考えなさい」ということについてはほとんど授業の中にない。先生からそういう問いを受けたことがないと思います。

言葉の意味というのはよくあったと思います。単語の意味です。分からないときは辞書を引きなさいと。辞書というのは難しい言葉をやさしい言葉で置き換えてあります。たとえば「学習辞典」というのは子供に分かる言葉に言い換えてある。難しい言葉を「難語句」といいますが、この難語句の意味はこれこれしかじかだということがいくつかの例をあげて示されている。ですから、言葉の意味ということぐらいはしょっちゅう国語の中では出てきて、それはそれでだいたい分かっていると思います。

ところが意味というのは、言葉の単語の意味ということももちろんありますけれども、

一つの文の意味、一つの文章の意味、あるいはいろんな出来事、事件がありますね。たとえば、この間大変なことがありました。９・１１の事件ですね。あの事件が私たち日本人にとって、おおげさに言うと人類にとってどういう意味があるのかというようなことがいろいろと問題になったわけなんですけども、そういう事件の意味、あるいは人間のやっている行為ですね、したことです。したことに対して「君、今そんなことをしたけれども、それが君にとって、あるいはこのクラスにとって、あるいはおおげさに言うと人間にとってどういう意味があるか考えてごらん」というふうな、そういう場面というのはおそらく、あまりなかったのではないかと思います。

言葉の単語の意味で終始して、辞書の単語の意味で間に合うような、そういう言葉の意味ということだけが終始なされているだけです。

たとえば、学級のことで言えば、学級の中の子供がけんかをします。けんかをすると先生はたいていけんかをした二人を呼んで「ａ君はどうしてｂ君をなぐったの」ときく。すると「だってｂ君が昨日ぼくをつついたんだもの」「ｂ君はどうしてａ君をつついたの」というと「だってａ君が一週間前にぼくにこんなことをしたから」というふうにだんだん話がさかのぼっていく。あるいは横へ流れていく。「わけ」をずっと問いつめていくと、結局手に負えなくなる。そこで教師がどういうふうに決着をつけるかというと「とにかくどっちも悪い」と喧嘩両成敗ですね。そういう形で決着をつける。

日常のちょっとした子供のけんか一つとってみても、その「わけ」というものをたどっていくと、いくらでもたどっていけるのです。極端に言えば人類発祥の時までたどっていくことができると思います。因果関係・原因結果・わけというのは、もちろんそれをたどっていくこともある意味で必要ですけれども。

ところが意味というのは、そういう性格のものではないのです。もし私が教師だとしたら、そういうけんかのわけをずうっとたどっていくこともいいでしょうが、ある程度ただしてもいいと思います。が、しかし、究極においては「君たちがそうやって無駄な争いをして、けんかしたということは、君のこれからの人生において、君の生き方にとってどういう意味があると思うか。また、君たちの争いが学級全体にとってどんな意味があると思うか」というふうに行為なり事件なりの意味について考えさせる。こういうことが実は必要だと思うのです。

ところがそういう場面というのはまったくないと言っていい。なぜかというと、教師の方も子供の方も「意味を問う」「意味を追究する」「意味を考える」ということをふだん授業の中でやっておりませんから、そこで突然、教師が「君たちのけんかという事件にどんな意味があるか考えてごらん」と言っても、子供の方は何をどう考えればいいのかさっぱり見当がつかない。ですから当然、教師の方も、そんなことを言ってもむだだし、しょ

うがない。ふだんそういうふうに教育していないわけですから。ですから、わけをただすということで、結果は喧嘩両成敗という形でうやむやにしてしまう。たとえば日常のできごと一つとってみてもそうなのです。

テロと戦争

この間の「9・11」でもですね、一方では「テロ」と意味づける。一方では、ブッシュは「新しい戦争」と意味づけましたね。新しい戦争というふうに意味づけることで、軍事予算を膨大な額にして軍隊を動かしてイラク戦争を始めたわけです。テロであれば、戦争を始めるわけにはいきませんね。テロであれば、当然、国際警察の手によって処理すべきことであるわけです。戦争というふうに意味づけたからこそ、また、それがまかり通ったからこそ、ブッシュは議会であれだけの膨大な軍事予算案を提出して、反対はたった一人ですか、ほとんど満場一致で決定した。新しい戦争に対しては戦争で応えるというふうにですね。

ところが一方では、やはり国際的な協力を得るためには、テロという意味づけをしなければなりませんから、一方ではテロと言ってアメリカは各国に協力を要請したわけですね。戦争であれば、自分の国の戦力だけで戦うわけですから、よその国まで巻き込むわけにはいきませんね。

ですから都合のいい時はテロと言い、悪いときは戦争と言う。われわれはそれを「二枚舌」と言います。その二枚舌がまかり通るというのは、意味ということが、意味とは何かということが、つまり小泉首相をはじめわれわれ日本国民の中にもちゃんとした形で理解されていないからだと思うのです。

もし意味ということがちゃんと理解されていたなら、あの事件の意味が何かということがちゃんと考えられておればですね、今日のテレビのニュースで小泉首相が「イラクに視察に行った結果、どうも南の方は戦争状態ではなく、危険な状態ではないから自衛隊をそこへ派遣してもいい」と言い出すようなことにはならないだろうと思います。

つまり意味ということがうやむやに扱われているために、たとえばこうした事態が起こりうるわけなのです。

意味の定義

では意味とは何かといいますと、意味の定義ということで、みなさんのお手元にあります資料、実は今日あわてて作ったのですが、それをごらんください。

ある哲学者も、ある文学者も、自分の書いた本の中で意味のことについて書くことになりハタと困り、意味の定義を求めていろんな本を読んでみたが、読めば読むほどわからなくなった、諸説あってまちまちで全部ちがうということをぼやいて書いておりました。まさにその通りで、意味とは何かという定義は、おおげさに言えば学者の数ほどあると言っ

ていいと思います。

そこで参考までに岩波の『広辞苑』、常識的によく『広辞苑』が引かれるわけで、私もそれをまねて『広辞苑』を引っぱり出したわけですが、これで納得して出しているわけではありません。つまり、こういうふうに考えられているという一つの意味として、つまりこれは「意味」の意味ですね。「意味」の意味がいくつか並べてありますね。

い・み【意味】①ある表現に対応し、それによって示される内容。㋑言語によって示され、表わされる内容。または、その指し表わし方の型。わけ。こころもち。→意義ー ㋺言語・作品・行為など、何らかの表現を通して表わされ、またそこから汲み取れる、その表現のねらい・かまえ・こころ。②物事が他との連関において持つ価値、重要さ。

いみ・あい【意味合】わけがら。子細。事情。

こんなふうに出ているんですが、さて、私は文芸学というものを専門にしていまして、世間では、学会では私の文芸学のことを「西郷文芸学」と名付けておりますが、その文芸学ではですね、だいたいは『広辞苑』の定義を、意味をふまえているんですけども、私のばあいは小、中、高の生徒を対象として指導をしておりますから、子供たちにもわかる形で次のような言い方をして教えているわけです。

・西郷文芸学においては、ほぼ右の広辞苑の定義に準じながら、小・中・高校の生徒をも対象として次のように教えている。

・意味とは、客観的にあるものではない。

○にとって

○としての

意味づけるものである

・意味とは、条件的である。（つまり、時による、人による、場合による、ということである。）

・意味には、

ことば

文・文章

事柄・出来事・事件

行為
・・・
など、多様な意味がある。
・〈わけ〉には、正解があるが、〈いみ〉には、正解はない。
・意味には、せまい　ひろい
あさい　ふかい
月並みな　独自な　ユニークな
相対的である。

客観的な意味はない

「意味」というのは「わけ」とちがって、客観的にあるものではない、つまり正解があるわけではない。人により時により場合によって、（つまり条件的にということですが）「何々としての」というふうに意味づけるものです。

よく私たちは「意味がある」という言い方をします。意味があるとかないとか。なんとなくわかるのですが、この言い方は正しくない。意味が「ある」というと、私たち以前に、すでにそこに何かがあるのだという感じですよね。ちょうど何か缶詰の中に牛肉が入っていると、缶詰の中にあると、だから缶詰のふたをあけて出せば出せると、こういうふうなものではないですね。

つまり内在するものではない。意味づける。意味を与える。つまり意味づけというのは意味を与えることです。意味付与です。ここが根本的にちがう。

どうも学校教育というのは正解を教師がいつも求めているといったような状態があるものですから、子供の方も、自分の言った答えが正しいか正しくないか、まちがっているかまちがっていないか、というふうにだけ考えてしまうのです。

ものごとには正解のある問題があります。たとえば「わけを考える」というのは正解を求めているわけです。しかし「意味を考える」というのは正解があるわけじゃないですね。

じゃあ、正解がないのなら意味を考えるとか意味を問うというのは無駄じゃないか。それこそ無意味じゃないかというふうに思われるでしょうが、しかし意味というのは、浅いか深いか、狭いか広いか、月並みな「そりゃそうだ」というだけのことか「なるほどそうだ」とうなるようなことか、というふうに相対的な違いがあるのです。

私たちが求めている意味というのは、正解を求めているのではなくて、一人一人の子供が、あるいは私たちが、それに対してどれだけ深い意味づけができるかということです。深さが求められているのです。深い意味づけということが実は求められるわけです。

では、深い意味づけとはどういうことかということをこれからお話ししようと思いますが、意味というのは客観的に正解があるということではないということです。「普遍的な意味」とか「一般的な意味」ということは言いますが、それは客観的な意味というのではないのです。多くの人が納得できるという意味で「一般的な意味」とか「普遍的な意味」とかいう言い方をしますけれども、それは正解ということではないのです。そこのところを誤解のないようにしていただきたいと思います。

今日は、これからいくつかの詩を使ってお話しします。詩は短いから手っ取り早いので、詩を使いますけれども、物語でもいいし、あるいは今日の新聞やテレビで報道された事件についてでもいいのです。ですけれども、みなさんが同じものを見ておられるわけでもないでしょうし、やはりここに具体的に眼の前にものを置いて話をしないと、話の土俵ができませんから、そのための手っ取り早いところ、短い詩ならばここでサッと読めるし、詩と話を見比べながら考えることもできるということで詩を選んでおきました。べつに詩だけが、意味を考えるために適当であるというわけではないのです。今言いましたような事情です。

この詩も、実はどうやって選んだかというと、家内が「これまでに取りあげてしゃべっていない詩を採ってくれ」と言うものですから、こういうことになりました。「意味の意味」を考えるのに最も適当だというものを選んだというわけでもないのです。それから、みなさんにとって一番関心があるだろうと考えたわけでもないのです。要するに「落ち穂拾い」ですね。これまでに私はいろんな詩について、いろんなことを書いたりしゃべったりしているんですが、どうもそれらについては聞き飽きたらしくて「まだ一度もやったことのない詩をやってくれ」と言うものですから、急遽ここに十数篇の詩を取り上げました。

それで、できるだけ深い意味づけができるかどうか。ここはひとつ、みなさんの側から批評していただけるものと思います。

もう一度言いますが、わけを考えるというような、「1足す1は2」というような正解があるのものではないのですね。「なるほど、そういえばそうだな、でも私としてはこういうふうに考えたい」と、たとえばこういうふうになるものなのです。ですから、そういうふうに聞いていただきたいと思います。

「おと」

ところで、ご案内のチラシに詩を一篇は載せた方がいいんじゃないかと家内が言うものですから、「おと」という詩を入れたんですが、みなさん今日お持ちになっているかどうかわかりませんけども、黒板に書いておきました。

おと　　いけしずこ（工藤　直子）

ぽちゃん　ぽちょん
ちゅぴ　じゃぶ
ざぶん　ばしゃ
ぴち　ちょん

ざざ　だぶ
ぱしゅ　ぽしょ
たぷん　ぷく
ぽつ　どぼん・・・

わたしは
いろんな　おとがする

これは工藤直子さんという詩人が書いていて、〈いけしずこ〉は「語り手」といいます。作者が作った人物で、語りの役を引き受ける人物という意味です。

一連に〈ぽちゃん　ぽちょん／ちゅぴ　じゃぶ／ざぶん　ばしゃ／ぴち　ちょん〉とありまして、二連に〈ざざ　だぶ／ぱしゅ　ぽしょ／たぷん　ぷく／ぽつ　どぼん・・・〉とあります。この〈どぼん〉の後の〈・・・〉は、この他にもまだいくらでもあるよ、ということです。

〈わたしは〉というのはこの〈いけしずこ〉、水ですね。水である、この語り手の〈わたし〉が〈いろんな　おとがする〉と言っている。こういう詩です。

これは子供のために書かれた詩です。工藤さんはほとんど子供のための詩を書いておられます。大人向けの詩もいくらかありますが、だいたいは子供向けの詩を書かれている方です。

今の日本の学校教育というのは、みなさんも新聞やテレビその他でご存知の通り、ひじょうに、一方で「ゆとり、ゆとり」ということが強調されて、反面授業時間数が極端に削られて、国語の時間なんていうのも本当に駆け足で、漢字の書取ぐらいでお茶をにごしているという状態で、最近は「学力低下」ということでずいぶん騒がれて来まして、ついこの間、中教審も文科省に見直しを迫りました。このままで行くと日本の子供たちの学力は極端に低下する、もう一度考え直してほしい、ということを言いました。我々は、文部科学省が新しい指導要領を出しましたときに、これはもう子供たちの学力が目に見えて低下するということを警告したんですけども、聞き入れないんですね。一方的にどんどんどん推し進めてしまいました。で、案の定、最近子供たちの学力がとみに落ちたということがいろんな場面で出てきて、あわてて今、善後策を講じているという状態です。

たとえばこんな詩を教材として授業するというと、どんな授業をすると思いますか。まず音読をさせるわけです。そうすると楽しそうに音読するわけですね。いかにも水がはねているような音をいろいろ工夫してやるわけです。「うん、今のはすごくよかった。水がはねている音そっくりだ」というようなことで、「上手、上手、楽しい詩だったね」と、これで終わりなんですね。おそらく作者の工藤直子さんがこの授業を見たら頭にくると思います。私はそんなつもりでこの詩を書いたんじゃない、と。工藤さんのデビュー作となった『てつがくのライオン』という、哲学するライオンの物語があります。動物園のライオンは哲学しませんが、文芸作品の中のライオンは哲学もするし、何でもするんです。人間と同じようなことをします。工藤さんの詩は、ある意味では哲学的なものをもっているわけです。この詩のどこがどう哲学的なのかとお考えになるでしょうけども。

相関的な存在

結局、水というのは、人間もそうですけども、人間について「打てばひびく」ということを言いますね。小さく打てば小さくひびく、大きく打てば大きくひびくというのが、もの、人間というもののありようです。水だって、大きな石を投げ込めば〈どぼん〉と音がするし、小さな石だと〈ぽちゃん〉という音になるでしょうね。実に無限の可能性を秘めている。つまり、人間という存在も、水という存在も他のものとの相関関係において存在する。

相関的存在だということが私の考え方の基本にあります。それから、西郷文芸学の原理は「形象相関の原理」といいまして、作品の中に描かれている形象（イメージ）は、たとえば水の形象（イメージ）は、石の形象（イメージ）との相関関係で〈どぼん〉という音を出す。小さな葉っぱか何かであれば〈ちゅぴ〉というふうな音を出す。鯉がはねると〈ばしゃ〉という音を出す。というふうに、その相手との相関関係によって、相手との関係如何によってその反応も違ってくる、出方も違ってくる、音も違ってくる。当然のことですね。相手が意地悪すればこちらも意地悪を仕返す。相手にやさしくされればこちらもそれに応えてやさしくする。人間というものはそうであろうと思います。

ですから、教育もそうですね。教師がどういう教材で、どういう授業をするかで、子どもたちがどういう答えを出してくるかということが決まるわけです。くだらん教材でくだらん授業をして立派な答えを得ようなんてことは、およそ不可能なことです。すばらしい教材を使って、すばらしい授業をしてはじめて子供たちがすばらしい反応を示すということになるわけです。

言ってみれば、ものというものは、人間というものは相関的な存在であるということです。よく「私は私だ」という言い方をしますが、私というのは、妻との関係においては夫であり、息子との関係においては親であり、学生との関係においては教師であり、女との

関係においては男であるというふうに、いかなる関係もない存在というのは考えられないわけです。「我」というのは「汝」がいて、「彼」がいて、「我」なんです。人間存在というのは、他者との相関関係において存在している。他者というのは、人だけじゃありませんよ。ものとかシステムとかいろんなものです。そういうものとの相関関係。相関関係というのは、ひびきあう関係といいますが、いろいろな関係があります。あらがいあう関係というものもふくめてです。そういういろいろな関係の中でいきている関係的な存在です。

関係的だからこそ、こちらが変われば むこうがかわる。むこうを替えればこちらも変わる。教育の営みというのはまさにそうなんです。一方的じゃないです。親が子を育てる。教師が生徒を育てる。その営みというのは、裏返していえば、教師である自分もまた人間的にしていく営みであるわけです。自分がゆたかになることで子供もまたゆたかになっていく。こういう相関関係があって教育という営みは成立しているわけです。

たとえばそういうふうにこの詩を意味づける。私はよく冗談に教師のみなさんに言うんです。この詩を自分の教室に貼っておきなさい。そして、子供に〈どぼん〉と言わせたかったら、そういう大きな石を力いっぱい投げ込みなさい。そうしてこそ子供は〈どぼん〉という音を出すわけで、小さな石をちょこんと投げて大きな音を期待してもそれは無理だと。

これは、私が教育にかかわっていますから、そういう立場からの意味づけです。みなさんの中で商売をなさっている方は、商売をなさっている立場で、お客さんとの関係なり何なりで意味づけてみられるといいのではないでしょうか。意味づけというのは「誰がどう意味づけるか」ということなんです。私がこういう立場でこういうこととして意味づけるというふうに条件的なものなのです。逆に、その人がこういうふうに意味づけたということを聞くと「あ、あの人らしい」というふうに思うということがあります。そういうものなんですね。

「とうげ」（松永伍一）

さて、松永伍一さんの「とうげ」という詩があります。たまたまですけど、後の方で真壁仁さんの「峠」という詩も出てきますが。

とうげ

松永伍一

とうげで
世界が二つに
わかれる

うしろには足あとだけが
まえには夢のばく発が

石ころを
一つしるしに
置こう

木々の枝から
光のしまが
少年のこころを包みにくる
そのとき
思想も
まえへ
一歩ふみだす

少年よ
ふりかえるな

これは松永伍一が、少年の読者に対して言ってみれば励ましの、人生の門出において、これから前途へ向かって一歩踏み出そうとする少年へのはなむけの言葉と考えていいと思いますが、そのために〈とうげ〉という具体的なものを持ってきている。題材といいますが、〈とうげ〉を題材として一つのテーマ、主題を展開しようとしているわけです。

峠というのはご存知のように上り坂があって、こちら側から登って行くわけですね。そして下り坂にかかって行く。そうすると峠というのはこちら側の世界とむこう側の世界を分けるところです。こちらの世界というのは自分が慣れ親しんだ世界。で、その世界にわかれを告げるというのは、さびしくもあり、あるいは不安でもありましょうね。しかし、これから行くであろう世界、峠のむこうに見える世界は、今まで自分が知らなかった、見なかった世界。そこにはいろんな希望もあるでしょうね。いろんな期待も夢もかけることができるでしょうね。そういう人生の一つの踏切とでもいいますか、そういったものをうたった詩だと思います。

やはり一歩を踏み出したらもう後ろを振り返ることなく前へ向いて行きなさいというふうに、いわば人生の生き方を教えている詩と言っていいと思います。

「峠」（真壁仁）

ついでに真壁仁さんの「峠」も見てください。

峠

真壁　仁

峠は決定をしいるところだ。
峠には訣別のためのあかるい憂愁がながれている。
峠路をのぼりつめたものは
のしかかってくる天碧に身をさらし
やがてそれを背にする。
風景はそこで綴じあっているが
ひとつをうしなうことなしに
別個の風景にはいってゆけない。
大きな喪失にたえてのみ
あたらしい世界がひらける。
峠にたつとき
すぎ来しみちはなつかしく
ひらけるみちはたのしい。
みちはこたえない。
みちはかぎりなくさそうばかりだ。
峠のうえの空はあこがれのようにあまい。
たとえ行く手がきまっていても
ひとはそこで
ひとつの世界にわかれねばならぬ。
そのおもいをうずめるため
たびびとはゆっくり小便をしたり
摘みくさをしたり
たばこをくゆらせたりして
見えるかぎりの風景を眼におさめる。

どうしても峠が題材というと、こういう詩になりますね。だいたい似たり寄ったりです。ちなみに峠という文字ですが山という字に上と下と書きますね。これは中国にはない漢字です。これは日本で作ったいわゆる国字です。和字ともいいます。日本で作った漢字もけっこういろいろあります。中国にないから、でも日本ではしょっちゅう必要だから発明

したのです。峠もその一つです。中国は漢字の国ですから何万という漢字があるんですが、その中に峠という字はないのです。では、中国には山はないのかというと、あるんです。山を越える道もあるんです。なのにどうしてか。

日本は大変せせこましい国土でしょう。前にもちょっとお話しした気がするんですが、「鉄道唱歌」に〈今は山中今は浜　今は鉄橋渡るぞと　思う間もなくトンネルの　闇を通って広野原〉とありますが、ひじょうにめまぐるしいですね。実に、あっと言う間に地形がくるくる変わる。これが日本という国土です。けれども中国は行けども行けども景色が変わらないです。山を越えても越えても、峠に立って向こうを見ると海なんてことはないです。峠のこちらは田舎でむこうは都会ということはない。行けども行けども似たり寄ったりの所。ですから峠という意識が生まれないのです。言葉がないからもちろん文字もないわけです。

たとえば凪というのも中国にはないです。やはりこれも島国である日本の風土を考えますと、朝凪、夕凪というのがありますね。風が陸から海へ向かって吹く。逆に海から陸に向かって吹く。その中間が凪です。中国大陸で凪なんて現象はめったに見られないでしょうね。ですから、言葉もないし漢字もない。日本人は中国からどんどん漢字を取り入れて、漢字をおおいに使ったわけですが、どうしてもないのは作ったわけです。

この真壁さんの詩も松永さんの詩と似たり寄ったりのところがありますね。

〈峠は決定をしいるところだ〉。われわれは峠に登ってこんなことはしません。これは喩えです。峠を喩えとして、人生の峠を意味している詩なんです。

〈峠には決別のためのあかるい憂愁がながれている〉。ふつう〈憂愁〉というのは〈あかるい〉とは表現しませんが、要するに峠というのは不安と希望、期待と矛盾する心情が入り乱れるところだと思います。今まで慣れ親しんだ世界から一歩見知らぬ世界へ踏み出して行くということは、恐怖もあれば、しかし希望もあれば、また過去のふるさとへの別れのつらさもあれば、なつかしさに後ろ髪をひかれる思いもあるでしょうし、さまざまな思いがめぐるところでもあろうと思います。

そういう人生の峠に立っていかに生きるかということを示唆した、そういう意味の詩であると思います。これは、みなさんも人生の中でいくつか峠というものを越えられたと思います。その時その時によって、人によって峠が何であるかはちがうでしょうけれども、やはり過去に決別してこれから未知の世界に踏み込んで行く、その時の心の在り方、そのへんを考えさせてくれる詩の一つであろうというふうに思います。

前の松永さんの詩とちがって、ここでは〈ひとつをうしなうことなしに／別個の風景にはいってゆけない〉とあります。このへんはなかなか鋭い言葉ですね。

〈大きな喪失にたえてのみ／あたらしい世界がひらける〉。要するに、そういったもの

を犠牲にして、そういったものを振り捨ててこそ新しい世界を得ることができるというふうな決意のほどが示されていると思います。

〈すぎ来しみちはなつかし〉い。しかしまた〈ひらけるみちはたのしい〉ではないかと。そこで一つの世界に別れ、これから新しい世界に入っていく。そうすると〈見えるかぎりの風景を眼におさめる〉ことができると。そういう詩です。

次に行きますが、私の話しは拙くても、詩がいいから、いい詩が多いから救いがあります。この詩をお持ち帰りになって自分なりに読まれたらいいと思います。私の話はきれいさっぱり忘れても、詩がおみやげになりますからね。私にとっても救いです。（笑）少々話がおかしくてもまずくても詩がすばらしいですから。

「眼」

岡山の詩人永瀬清子さんの「眼」という詩があります。

眼

永瀬清子

一人の子供をつれた母親は自分のと四つの眼をもって物を見るのである。二人の子供をつれた母親は六つの眼をもって物を見ねばならない。そしてそれだけの速さをもって疲れる。然しそれは犠牲的な疲れとのみは考へられない。その眼は望遠鏡のレンズと重なってゐるやうに重なってゐる。

いつか予期せざる方向へその望遠鏡が母を導びく。

母親でもあった人です。母親としての詩もいくつかありますが、その中の一つです。〈一人の子供をつれた母親は自分のと四つの眼をもって物を見るのである〉「えっ？」と思いますよね。こういうのを「仕掛」というんですが、「えっ、どういうこと？」と思って次を読みますと〈二人の子供をつれた母親は六つの眼をもって物を見ねばならない〉。「ああ、そうか。なるほど。一人が二つの眼を持っているとすると、母と子二人で合わせて六つの眼」ということになりますね。単純な計算です。その六つもの眼で見るとなると、なんと、もう、〈それだけの速さをもって疲れる〉。ということは、母親は自分のことだけを考えておれないんですね。子供の身にもなり、上の子下の子のそれぞれの身にもなってそれぞれの子供の人生を、人生と言うとおおげさですが、その日その日のできごとを見てやらなくちゃいけないですね。これはまったくくたびれ果てることだろうと思います。

〈それだけの速さをもって疲れる〉というと、お母さん方はたぶん実感としてあるんじゃないかと思います。

〈然しそれは犠牲的な疲れとのみは考へられない〉。ここがちがうところですね。世間の母親にしてみると「ああ、もうしんどい。もういや。早く子離れしたい」というわけで、「やれやれ」という頃にはもう年も五十か六十になって、あとはあの世というだけのことになってしまいますが、永瀬さんは、そのあとにすばらしいことを言っています。

比喩的意味

〈その眼は望遠鏡のレンズと重なってゐるやうに重なってゐる〉。ここに比喩、喩えというものがひじょうに生かされているんです。たいてい詩の中には一つや二つすばらしい喩えがあります。その喩えというものは、実際の現実の事柄の意味をもっとふくらますものなんです。深めるものなんです。望遠鏡というのは、みなさんご存知の通りレンズがいくつも重ねてあるわけです。それによって遠くのものがはっきりと、鮮明に見える。たとえば天体望遠鏡というものがあります。最近、火星が大接近したというので大騒ぎしましたね。火星というのは、どうも運河があるようだということを昔おそまつな望遠鏡を見て思った天文学者がいたのですが・・・。

とにかく、二人の子供がいるとすると四つのレンズを自分の二つのレンズに重ねて見れば、肉眼で見て見えなかった遠くのものが鮮明に見える。これは喩えですね。

喩えというのも、これは一つの意味なんです。「比喩的意味」といいます。ある実際のできごと、事実、事柄を意味づけるということはなかなかうまくできません。そこへ喩えをもってくると、その事柄を喩えによっておもしろいかたちで、わかりやすいかたちで、しかも深い意味づけができる。これが喩えというもののはたらき、役割なんです。

そうすると、望遠鏡を眼に当てたとたんに今まで予期しなかったものがパアーッと眼に飛び込んで見えてくるということがあります。

お母さん方は子供を持ちますと世間とのつきあいが広くなる。学校のＰＴＡにも出かけて行く。やれ受験だ、やれ何だと新聞やテレビにも眼を向ける。世の中の動きにもどうしても眼をやらざるを得なくなってくる。そして結果として世間がよく見えてくるようなことになる。子供を持ったおかげでということでしょうね。家内なんかも子供のおかげでずいぶん勉強させられたと思います。したくなくてもせざるを得ないという状況になる。

それを犠牲と考えるか、幸せと考えるかですね。それは意味づけする者の主体性です。同じできごとでもプラスに意味づける人とマイナスに意味づける人があるんですね。それなら、いっそプラスに意味づけて前向きに明るく生きて行った方がいい人生じゃないでしょうか。

意味づけというのは、そういう役割をもっているのです。どんなに悲惨な経験でも、そ

れをプラスに転じることができる。意味づけするのは自分ですから。自分が意味づけして、ただし自分が納得できる意味づけをしていくということでしょうね。たとえ他人は納得できなくても自分が納得できる意味づけができればまずは、よしとしていいんじゃないでしょうか。

永瀬さんの「眼」という詩、これも子育てでぼやいているお母さんに読ませたいですね。あなたは、子供が二人いるというのは、世の中を六つのレンズで見ていることになるんですよ、と。今まで見えなかったものが見えてくるようになるんですよ、というふうに周りのお母さんに教えてあげてください、この詩を。いい詩ですね。

ここでは、やはり〈望遠鏡のレンズと重なってゐるやうに〉という比喩がひじょうに効いていますね。

「ミミコの独立」

さて、次ですが、山之口獏さんの「ミミコの独立」です。

ミミコの独立

山之口　獏

とうちゃんの下駄なんか
はくんじゃないぞ
ぼくはその場を見ていったが
とうちゃんのなんか
はかないよ
とうちゃんのかんこをかりてって
ミミコのかんこ
はくんだ　というのだ
こんな理屈をこねてみせながら
ミミコは小さなそのあんよで
まないたみたいな下駄をひきずっていった
土間では片隅の
かますの上に
赤いはなおの
赤いかんこが
かぼちゃとならんで待っていた

山之口獏さんは沖縄の出身の詩人で、貧乏だった人です。昔の詩人はみな貧乏でしたが、ま、中には貧乏でない詩人もいましたが、それは詩で食っていたんじゃなくて、家の財産で食っていた人ですね。萩原朔太郎みたいな人です。彼は前橋の旧家の出身で、家が財産がありましたから、それで食って詩を書いていました。しかし室生犀星という人とかは小学校もろくに出られない人で、萩原朔太郎と知り合って、彼の家にしばらく寄宿してそこで親交を深めたという逸話があります。

話がちょっと横道にそれましたが、山之口獏さんもものすごく貧乏でですね、金子光晴とたいへん仲がよくて、金子光晴もまた貧乏な詩人で、ま、当時はみんな貧乏だったわけです。貧乏でない詩人のほうがめずらしい。例外的に財産で食っていた詩人がいたというだけでしょうけど、そんなことはどうでもいいんですが。詩とは関係ないんですが、獏さんの「獏」というのは夢を食う想像上の動物です、まあ、夢しか食えなかった人なんでしょう、飯が食えなかった人なんですね。で、金子光晴の所に転がり込んでは、そこで一宿一飯のといいますか、金子光晴は彼が来ると家の中の何かを抱えてこっそりと外へ出るんだそうです。質屋へ行って金に替えて何か買って帰って食わしたらしいです。そういう友情をあたためた二人ですけども、その獏さんに小さな女の子がいて、その子を題材とした、主人公とした詩もいくつか書いています。

黒田三郎も小さな女の子がいて、奥さんが病気で入院している間やもめ暮らしで、その女の子と二人でなんじゃかんじゃやって、そのへんのことを詩にしたものがいくつかあります。

この「ミミコの独立」も父親の目から見た小さな女の子のたいへんユーモラスな姿を描いているわけです。

〈とうちゃんの下駄なんか／はくんじゃないぞ／ぼくはその場を見ていったが／とうちゃんのなんか／はかないよ／とうちゃんのかんこを〉、〈かんこ〉というのは下駄です。〈かんこをかりてって／ミミコのかんこ／はくんだ　というのだ／こんな理屈をこねてみせながら／ミミコは小さなそのあんよで／まないたみたいな下駄をひきずっていった〉。父親の下駄をですね。〈土間では片隅の／かますの上に／赤いはなおの／赤いかんこが／かぼちゃとならんで待っていた〉。

こういう詩です。これに「ミミコの独立」という題を与えているんですけども、私もここに息子がいるんですが、父が子の成長を見る目にどこか共通なものがあるなあと思ってこれを読んでいるんですけども、これは私が選んだんじゃないですからね、何回も言いますけども。（笑）息子に聞かせようと思って選んだんじゃないんです。たまたま女房が選んだのを今読んでいるわけです。

これを読みますと父の世代、ま、母の世代でもいいんですが、父の世代というものの業

績といいますか、歩いて来た道がこの〈下駄〉に象徴されますね。つまりは子の世代というのは、まさにそれを踏み台にして自分のこれからの人生を独立して生きていくという、何かそういうふうに意味づけたい。これは私が父親だからでしょうかね、こういう意味づけをするというのは。

一番最初に言いましたように、誰がどう意味づけるかということなのです。くれぐれも、この詩はこう読むのだということとして聞かないでくださいね。ほかならぬ私が、父親である私が息子を目の前にして思わずこういうふうにこの詩を意味づけたということとして話をしているわけです。ですから、みなさんはまた別なアングルから、別なポジションから自分なりの意味づけをしてほしいと思います。詩を読むことの楽しさは、他の人の解釈を読む楽しさもないではないけれども、やはり、私は私でこういうふうに意味づけるということに詩を読む喜び、楽しさというものはあるのです。発見というのがあるのです。ぜひ、そういうふうに読んでいただきたいと思います。その一つの見本を、あまりたいした見本ではないですけども、お見せしているわけなんです。

意味づけというのは、私はこういうふうに意味づける。だとすると他の人はまたちがった意味づけの仕方をするだろう。で、どっちが正しいかではないんですからね。どっちがおもしろいか、どっちが、なるほどとうなずけるかという違いはもちろん出てきますけど。

この父親の慈愛の目でとらえた幼い子供の姿なんでしょうが、やっぱりここには父と子の世代の間で歴史が紡がれていくという、そんなことが見えてくる気がしますね。

しかしまあ、この幼子の〈独立〉ですからね。独立とは言っても幼子の独立ですから、いわば程度が知れている。ま、言ってみると〈かぼちゃ〉と並べる程度の独立じゃないでしょうか。それでもこれは幼子にとっては精一杯の独立ですよね。その年頃その年頃を一人前に生きているわけですから、五歳の子は五歳の子なりに一人前、十歳の子は十歳の子で一人前の生き方をしているわけですから、この子はこの子で一人前の独立を、つまりはこういうかたちで勝ち取って（笑）いっているわけでしょうね。

詩のゆたかさ

それにしてもなんだかほほえましい詩ですね。この〈赤いかんこが／かぼちゃとならんで待っていた〉というあたりがなんとも言えない。私は、ああ、この詩のゆたかさだなあと言うか、いろんな感情が綾なしてくるところがありますね。やはり詩というのはこういうものをもっているんですね。理屈じゃないですね。ここが哲学とちがうところです。哲学では〈かぼちゃとならんで待っていた〉なんてことはあんまり言わないです。これはやっぱり詩ですね。もう、まざまざと〈かますの上に〉〈赤いかんこ〉と〈かぼちゃ〉が並んでいる。そしてその〈赤いかんこ〉をはく幼子と〈かぼちゃ〉とが並列されている。一緒にされてしまう。かぼちゃ並みになってしまうということなんですね。

「棒をのんだ話」

次に「棒をのんだ話」。ちょっとすさまじい詩ですけども、読んでみましょう。

棒をのんだ話

石原吉郎

うえからまっすぐ
おしこまれて
とんとん背なかを
たたかれたあとで
行ってしまえと
いうことだろうが
それでおしまいだと
おもうものか
なべかまをくつがえしたような
めったにないさびしさのなかで
こうしておれは
つっ立ったままだ
おしこんだ棒が
はみだしたうえを
とっくりのような雲がながれ
武者ぶるいのように
巨きな風が通りすぎる
棒をのんだやつと
のませたやつ
なっとくづくの
あいまいさのなかで
そこだけ　なぐりとばしたように
はっきりしている
はっきりしているから
こうしてつっ立って
いるのだ

こういう詩なんですが、ちょっとみなさんイメージが実感としてわきますかね。新聞や週刊誌ばっかり呼んでいる人はですね、こういう詩をやっぱりそういうふうに読もうとすると結局何が書いてあるかわからないということになるんです。詩というのは、素直に読むというと何ですけれども、なんと言ったらいいでしょうね、そのイメージをすなおに受け取って読んでいってほしいですね。そうは言っても・・・というところでしょうが、実際にやってみましょう。

〈うえからまっすぐ〉頭のてっぺんからですよ、〈棒〉を〈おしこまれて〉、日常にはそういうことはありませんよね。ちょっと自分の頭の中にイメージしてみてください。

私は教育の現場とかかわって仕事をしているものですから、今の小学校、中学校の現場を見ますと、文部科学省から、教育委員会から、管理職を通して、上から「こうしろ、ああしろ」ということがいっぱい入ってくるわけです。そりゃ、ちゃんとしたまともな指令ならおおいにけっこうなんですけども理不尽な指令がいっぱい来るわけです。ですから、この前みたいに「ゆとり、ゆとり」とかっこいいことばっかり言って結果的には子供の学力がものすごく低下してこれからどうなって行くかわからないという心配が出てきましたね。ことほど左様に文部科学省というのは、いっさい現場の声を聞かないで机の上でプランを立ててそれを教育委員会を通して押しつけてくるんです。

たとえば一つの例を申し上げましょうか。二、三年前に全国一斉にパソコンを二十台か三十台ぐらいずつ送りつけて来たんです。これは、教育の現場から「パソコンがほしい」という声が出たからじゃあないんですよ。そりゃ、地域に一人や二人ぐらいは言っていたかも知れませんが、言ったとしてもほんの一パーセントか二パーセントかその程度のことじゃないでしょうか。

私は教育の現場をしょっちゅう回っているからわかりますが、教育の現場が求めているのは「もうちょっと図書費がほしい」ということなんです。たとえばこの地域ですと、牛窓東小なら東小の規模の小学校で年間、図書費はいくらだと思いますか。学校の規模にもよりますが、だいたい五万円から十万円ぐらいなんです。二十万円というとおどろきです。よっぽどのことです。

私はもちろん仕事が仕事だからですけども、私でも月に十万円やそこらは本を買います。まして学校でしょう。

私は学校へ行くと必ず図書室を見に行くんです。そうしますとね、もう手垢にまみれて表紙も破けたすすけたような古くさい本が入っています。もう食欲をそそらないです。あんな本を手に取ってみようという意欲は起きないです。でもこれは備品扱いになっていますから捨てるわけにいかないんです。極端な話、たとえば植物図鑑というのが入っていると、新しい植物図鑑を買うことができないわけです。だいたい、金額がわずか十万、せい

ぜい十五万でしょう、年間。とてもじゃない、いろんな本を買えるわけないですね。ひじょうにおそまつな図書室です。

ところが、パソコン一台が二十万でしょう、おおざっぱに言えば。いろんな附属品もくっついて。それが学校に十台も二十台もポーンと。それらを実際にはどうしているかというと、パソコン教育をやっているところは、特別に指定された学校で本当に微々たる数です。その他大勢の学校ではほとんど「高級なおもちゃ」です、子供にとっては。それでゲームをして遊んでいます。

たとえパソコンで情報を採ったとしても第一、その字が読めないんですよ。ところが図書室に入っている本は検定を受けていますから、少なくとも小学校の子供なら読めるように書かれています。そして内容も精選されていますから、まず心配がない。ところがパソコン業界が作っているようなソフトというのは、内容が教育的に見て無責任なんです。

ひどいところでは、ある学校では校長さんが鍵をかけています。使う時にはちゃんと許可を得て使わせる。なぜかというと、壊すとか維持費とかいうことを考えると頭がいたいわけです。

つまり文部科学省は教育のためにやったんじゃないんですよ。通産省がですね、もうこんな話をするとだんだん怒りがこみ上げてくる（笑）んですけど、今ＩＴ産業というのは国際的にお互いに競り合っているわけでしょう。アジアでも、たとえばシンガポールあたりでもどんどんやっていますね。そうすると世界の中に日本も競争で割り込んでいかなくちゃいかん。そのためには一番最新の技術をもった器機を市場に出していかないと勝負に負けるわけですね。そのためには今持っている器機を売って、その金を回転資金にして新しい器機の開発をしなくちゃいかん。日進月歩の世界ですからね、この世界は。

ところが、みなさん車だってテレビだって十年は使うでしょう。二、三年で買い換えますか。たいていの人は買い換えないと思います。パソコンだってそうしょっちゅう買い換えるわけにはいきませんね。ですから市場が頭打ちになってくるわけです。ですけども、新しい器機を開発するためには資金が必要です。その資金は、今持っている器機を売った金を資金にまわさなくちゃなりませんね。

そこで通産省が政府に泣きついたわけです。なんとかしてくれというわけです。政府というのはご存知の通り自民党の政府です。自民党というのは企業の献金で息しているところですからね。企業の金を食ってやっているところですから企業の要請に弱いのは当然のことです。それで政府は文部科学省に押しつけたわけです。なんとかしてくれと。それで、しょうがない、文部科学省は通産省から回ってきた器機を買い取って、もちろん税金でですよ、そしてそれを天下りに教育の現場へ押しつけてきたわけです。で、教育の現場は混乱しましたね。戸惑いました。なんで今、しかも小学校でですよ。

これからの世の中、パソコンは必要です。私もパソコンを使っています。でも、これは高校の段階からでいいんですよ。なぜかというと、「今、小学校でパソコンを教えて、今のうちから慣れさせろ」と言うんですが、今の器機に慣れた小学生が高校を出る、大学を出るという頃にはもう今のようなパソコンは使っていませんよ。何にもならないです。それよりかは、図書室を充実させて、ちゃんとした図書をうんと読ませて、そしてその力があってはじめて高校でパソコンを使って情報を採ったときにその情報がちゃんと読める。

今の六年生がインターネットでいくらいい情報を採れたからといって読めやしませんよ。半分も読めないです。

それから、中にはくだらんものもいっぱい出てきます。私は「原発」に関する資料をインターネットで採ってみました。するともう八割から九割が原子力発電所大賛成。つまり向こう側の宣伝の文書です。そういう悪いマイナスの情報があふれている中で、情報の読み方も、読解の力もついていない段階の子供たちに使わせるとは・・・。これはもう宝のもちぐされです。ですから子供たちはゲームをやって遊んでいるんですよ、結局。ほんの一部の、パソコンに熱心な先生が受け持っている教室だけがなんとか形をなしているという程度です。なんで、こんな話になったんでしたっけ。（笑）

象徴的意味

詩にもどります。それで、上から教育現場に「ああしろ、こうしろ」と指令を押し込んでくるわけです。教師の頭の中に棒をつっこむように。そして、「これはこうだからこうだ」と。そうやっている校長や教頭も自分の言っていることに説得性がないということはわかっているんです。でも上から言われたことはやらなきゃならんからやっているだけです。

それをここにこう書いているわけです。〈棒をのんだやつと／のませたやつ〉の〈なっとくづくの〉形になっているんですよね、しかし〈あいまいさのなかで〉。納得させられているんですね。納得したんじゃないです。納得させた方も納得させられた方も、本当は納得させてもしてもいない、そういうあいまいさの中で、でもやらなくちゃならないからしているという、これが現在の学校現場の実状なんですね。

みんな棒をのまされているわけです。棒を押し込まれているわけです。そういう状態です。気の毒な状態です。今教師になるということは本当に気の毒な状態だと私は思います。情熱をもって教育系大学へ入って、教師になる夢をもってがんばって、いざ現場に飛び込んで来るでしょう。そうすると、もう、すごいですよ、報告書が。授業のために教材研究をする時間どころじゃないですよ。くだらん、いろんな形式的な報告書をいっぱい書いて出す。そんなもの校長も教頭もろくに読みやせんですよ。いちいち読めるもんじゃないです、たくさん出て来るんですから。ただ「めくらばん」を押して、型のごとく処理してい

る。ただ、お役所仕事ですね。教育の現場が役所になっちゃいかんです、役所の方には悪いですけど。教育現場は人と人とがぶつかり合って教育をするところです。

今そういう状態の中に教師は置かれています。私はこの「棒をのんだ話」というのは、作者の石原さんは何も教育の現場を知って書かれたわけではないですよ、でも官僚主義的な現在の機構、たぶん会社もそうなっていると思います、役所はもちろんそうです、官僚ですから。要するに官僚主義というものの持つ、こういう〈棒〉をのませる、〈棒〉を押し込む。そしてぎくしゃくしたかたちでしか生きていけない。棒を突っ込まれたら柔軟に動けないでしょう。こういう状態がまさに今の教育現場のそのまんまです。

私は漫画家もこうした教育現場のことを取りあげて漫画にしてくれるといいなあと思うんです。いっぱいありますよ、漫画の題材になりそうなことが。それから綾小路とかいう四十、五十のおばさんの悪口ばかり言う漫談の人がいますが、あの人がもし教育現場に入って見たらいくらでもおもしろい話が作れると思います。

要するにこの〈棒〉が何を意味するかということです。これを「象徴的な意味」といいますが、この〈棒〉のイメージが、まさに今の教育現場の人間関係、つまり管理職と教師の間の関係の中にある姿を象徴しているというふうに思います。今〈象徴〉という言葉を使いましたが、これもやはり「意味」なんです。そういう教育の現場の様子をちがったものごとのイメージで意味づけているということです。比喩もそうですけども。

「百人のお腹の中には」

さて、これもまた話し出すと腹の立つ話ですけども、石垣りんさんの「百人のお腹の中には」という詩があります。

百人のお腹の中には　　石垣りん

テーブルの上に百枚の皿
その前に百人の人
皿の上には百匹の比良魚、

食器のふれ合うかすかな音の中で
魚はわずかに骨と、頭と、しっぽを残される
（乙姫様がごらんになったら、何ということか！

百人の紳士淑女
白いナプキンで唇を拭きとって、しとやかに話すこと

「まあ、この頃の世間は何ということでしょう」

百人のお腹の中には
百匹の魚の死。

石垣さんは私と同年です。お互いに若い頃ちょっと親しくなって、それ以上の関係は何もない（笑）ですけども、一緒に酒を飲んだりしていた人です。いわゆる学歴はない人です。銀行で下っ端の事務の仕事をしていて、銀行員の詩を書き始めてそこからスタートした人です。ですからひじょうに生活感覚のある詩です。永瀬清子さんともどこか共通するところをもった詩人です。この前の朝日新聞に写真入りで詩が載っていましたね。

諷刺

〈テーブルの上に百枚の皿／その前に百人の人／皿の上には百匹の比良魚〉これは、まあ、ふつうの姿として考えられることですね。

〈食器のふれ合うかすかな音の中で／魚はわずかに骨と、頭と、しっぽを残される／（乙姫様がごらんになったら、何ということか！）〉このへんは宮澤賢治の書いた一節をちょっと思い出させられます。賢治もそういうことを言っています。われわれが何の疑問も持たずに魚を食っている。でも、それを後ろから乙姫様なり魚なりが見たら何と思うだろう、というような意味のことを書いた作品がありますが。

〈百人の紳士淑女／白いナプキンで唇を拭きとって、しとやかに話すこと／「まあ、この頃の世間は何ということでしょう」〉〈百人のお腹の中には／百匹の魚の死。〉これを読みますと私はアメリカのペンタゴンの中を思い浮かべるんです。夜な夜なと言っては大げさでしょうが、しょっちゅうパーティが開かれるわけでしょうね。高級官僚のパーティですね。紳士淑女の集まりです。そこではもちろん今のイラク情勢やテロの問題とかが「こまった戦争、こまった問題だ」と、こまった世相として取りざたされているだろうと思います。

然し実は彼らこそがたくさんの〈百匹の魚〉を死に追いやって、それをむさぼって、それで腹をふくらませている〈紳士淑女〉であるわけです。そういう世相をいわば「諷刺」している詩として私は受け取るわけです。詩というのは、時代を越えて、社会を越えて洋の東西を越えます。もちろん石垣さんは今のイラク戦争の事実を知っていて書いたわけではない。ずうっと前に書いた詩ですから。しかし、ここに描かれているイメージは、自分たち百人が百匹の魚をむさぼり食っている、しかしその死について思いをいたすことなく、ただ世相を嘆いている。その世相をそのように作ったその根元が自分たちにあるというこ

とは、もうまったくわかっていない。というか、わかろうとしない。こういった世の中の姿が見える、諷刺されている。

意味とイメージ

つまり詩というのは、いつの時代でも、どこへでもそれが意味づけられるものとして生きて働いていくのです。逆に言うと、読者がそういうふうに自分の今生きている実感から意味づけていくということができる。それは具体的なイメージがあるからです。イメージというのは、いろいろに意味づけすることができます。ここがイメージのもつすばらしさなんです。また同時にイメージのおそろしさとか、落とし穴もあるんですが。豊かなイメージであればあるほど、いろいろな立場、いろいろいろな角度からいろいろな意味づけができる。

私たちが、たとえば万葉なり古今なり、あるいは平家物語なりを古典として現在読みますね。描かれていることがらは古いことです。しかしひじょうにイメージゆたかに表現されている。そういうイメージを私たちは現在生きている立場から自分なりに意味づけすることができるのです。こういう「イメージと意味の関係」があります。イメージであるからこそいろいろな意味づけができるという可能性があります。もちろん作者は自分なりの意味づけをして書いているでしょうが、イメージは作者が意味づけた枠の中にカチッとはまっているものというわけではないのです。言ってみれば、イメージによって方向づけられてはいるけれども、限定しているわけではない。枠にはめているわけではない。タガにはめているわけではない。そこがイメージというもののもつ独特の性格だと思います。

読者の責任

数式というのは数式の意味しかない。それ以外に解きようもないわけですけども、イメージの世界というのは、いい加減な意味づけもまたできてしまうわけです。読者によっていろいろです。

ですから、詩を詩たらしめるというか、その詩をすばらしい詩に仕立て上げるのは読者の方だと思います。読者に責任があると思うのです。詩をすばらしい詩として、意味深いものとしてその詩を読み取るということは読者の側の主体的な責任というふうになるんじゃないでしょうかね。どんなすばらしい詩でも、読み手によってはくだらん詩でしかない、「なんだ、これは」と読み捨てられてしまうということも起こり得るわけです。

石垣さんのこの詩はひじょうにするどい諷刺の力をもった詩だと思います。自分たちがたくさんの魚の命をその手で死に追いやっている。それでいて口では（この頃の世間は何ということでしょう）「あの9・11のテロはなんというすさまじいテロなんでしょうあれをあのままにしておくわけにはいかないわ」というようなことをしきりに語るわけでしょうね。

「そのためにはやっぱりイラクへ軍隊をやってフセインを追っ払ってしまう以外にない」なんてことを言っていたんでしょうね。しかしその結果どれだけの罪なき人々がイラクの国内で殺されたでしょうか。すごいですよね。そういう数をでかでかと毎日のようにくり返し出すべきだと私は思います。イラクでこれだけの人が死んでいるのが今の真実だということを数として知らしめてほしい。交通事故で死んだ人の数は警察から発表されますよね。このへんはどうですか。東京あたりでは交通信号の横に「本日の死亡者数」が出ています。あれはあれでいいでしょうが、今この世界中でどれだけの人間が戦火によって殺されているかという数を出しなさいと私は言いたい。そうしたら少しは身にしみて今のおぞましいイラク戦争の状況のことを考えるのではないかと思います。

いやあ、なんか、私が読むとみんなこういうふうになっちゃうんですね。（笑）すみません。みなさんはもう少し優雅な読み方を家に帰られてからしてください。

ただ、しかしどう考えても「棒をのんだ話」とか「百人のお腹の中には」とかいう詩はどうまちがっても優雅な読みはできそうにありませんね。みなさんの方がもっとすごい読み方をしてくれるかも知れませんね。

今の教育現場の実状と重ねるとみごとに「棒をのんだ話」がまざまざと見えて、石原さんが今の教育現場の状況を知っていて書いたのじゃないかと思うぐらいの詩です、本当に。

「百人のお腹の中には」というのは今のイラク戦争をめぐって混乱しているアメリカのワシントンのペンタゴンの要人たちの上流社会のパーティの様子が目に見えるようです。

「手」

次はちょっとほのぼのとした詩に行きましょうか。八木重吉の「手」です。

詩人も自分の子供、特に幼子を題材にすると、ほんわかとした、こちらがほほえみたくなるような詩が多いですね。みんなそうだと言っていいですよ。黒田三郎さんの「夕方の三十分」なんていう詩も、奥さんが入院して小さな〈ユリ〉という娘をかかえたやもめぐらしでおさんどんをするわけですよ。台所に立って目玉焼きか何か作ったり、それもウィスキーをチビチビやりながら作って女の子に食わしているんですが、そこでの親子のやりとりが何とも珍妙で笑っちゃうんですけど、笑いながら涙が出てくるんですよ。

この八木重吉は敬虔なクリスチャンで、胸を患って三十かそこらで亡くなりました。ひじょうにやさしい言葉で、しかし信仰に厚い人でしたから、神というものにふれるような詩も書いていますが、こういうふうな自分の子供、女の子と男の子と二人いましたが、その子供がモデルになっています。

手

八木重吉

電気が消えた
お手手ないない
お手手ないないって
もも子がむちゅうで両手をふりだした
しんでしまうようなきがしたんだ
手がないとおもったんだ

この詩はほほえましいという感じももちろんあるんですけども、人間というものが、幼いながらに「死」というものを感じとっているというか、「死」というものに向かい合っているというか、ああ、ここが、やっぱり人間というものは動物とちがうんだなあと思いますね。

動物というのは、たとえばチンパンジーのように知能の高い動物といわれているものでも、私は専門じゃないからちょっと責任が持てない話ですけども、霊長類の専門家の方々の書いた本を読みますと、彼らには「死」というものはわからないらしいです。もちろん異常な状態というふうにはわかるでしょうが「死」というものの認識はないらしいんです。たぶんそうだろうなと思います。

実は家に「ミール」という名を付けた犬を飼っていたんですよ。この間亡くなりました。もう十三か十四でしたからもう寿命と言えば寿命でしたが、小さい時から一緒に猫も飼っていたんです。これがもう本当に姉妹のように仲がよくて、仲がいいけどもちょっと争ったりもするんですけどね、とにかくずうっと十数年共に過ごしてきたわけです。で、ミールが亡くなるときに、臨終の間際ですが、猫がそばに付き添っていて、私は見ていないので後で家内に聞いた話ですが、目やにが出るとそれを一生懸命なめてやったり、人間の言葉で言うと介抱ですね、そうして結局ミールは息をひきとって、裏庭に埋めてやるのをじいっと見ていたそうです。ちょうど後ろに白いムクゲの花が咲いていたのでそれをたくさん敷いて埋めてやったそうですが、私が旅に出ている間のことです。そのそばに大きな庭石があってその上から一部始終を猫は見ていたそうですが、その後、猫はなかなかその場所を去らない。何日も何日もその岩の上に来てじっとしている。私たちがそばへ行くと「ここにいると思うけど、どうしたのだろう？」と訴えるような鳴き方をするんです。これは「死」ということの認識はないけれども、これまで一緒にいたミールに何か異常があってここで消えた、どこかこのあたりにいるはずだ、いつかここから出て来るにちがいないというような思いがあったのでしょうね。こちらがもらい泣きさせられるような感じでした。

とにかく犬や猫には「死」という認識はないらしいです。これは私が言っているんじゃ

ないですよ。専門家の方が書いているのを読んだり聞いたりしますと、何か異常な事態になっているというふうにはわかる。

この詩に出て来る〈もも子〉は二、三才だと思います。でも自分の手が見えなくなったということで〈お手手ないない／お手手ないない〉と言う。もう何かそれが、自分という存在がここで消えてしまう、「死」というものにつながって行く、そういう恐怖感。これは人間のみが持つものでしょうね。そういう想像力と言ってもいいと思うんですが、そういうものが人間の歴史をずうっと今日まで築いて、文明の歴史を造って来たんじゃないかと思いますね。

ここで私はもう一つこういう意味づけをしてみたいと思います。これは子供の姿ですから、私たちはこれを見ると、思わずふっと笑ってしまいますよね。小さい子の無邪気なユーモラスな姿だなあと。ですけども、同じようなことを私たち大人もどこかでしているのではないだろうか。つまり「死」というのは、題材は犬猫であっても、題材は幼子であっても、そのテーマは、主題は、大の男が意味を問うに値するものなのです。たとえばここには、幼い女の子が、電気が消えて自分の手が見えなくなった。見えなくなったら〈お手手ないない〉と言って、まるで死んでしまうかのような恐怖感にとらわれている。この姿はどう見てもある意味ではこっけいなわけです。思わず笑っちゃう。しかし、この幼い子供の姿を、詩として読んだときにどのように意味づけすることができるか。

私たち大人も、自分で手を振っていながら〈お手手ないない〉と言っているようなことを、はたから見ると滑稽でしかたないようなことを、しかし自分はいたって深刻にやっている。そんなことはないでしょうかね。

自分の手を振っているわけですから、手がないはずはない。でも〈お手手ないない〉と言う。なぜかというと手が見えないからです。現実に自分が振っている手が、電気が消えていて見えないからといって、振っていながら〈ない〉という、矛盾した、こっけいな状態に私たちが陥るということはないだろうか、と私は思うのです。どこかでありそうですよね。今ちょっと思い出せませんが、夜中に思いをめぐらしていると、自分で手を振っていながら、振っている手を「ない」と言っている女の子と同じように恐れおののいている自分の姿はないだろうか。たとえばこんなふうに考えることが、意味づけるということです。

作者の意図と読者の意味付与

決して作者がここにこういう意味を込めて書いたかどうかという問題ではない。「作者の意図」というんですけども、作品というものがここにありますね。作者はじぶんなりの意図というものをもって書くわけです。自分なりの意味づけですね。しかしこれはイメージとしてある。具体的なイメージとして出される。それを読者が、読者といってもいろい

ろですが、今日の私である私が意味づける。十年後の読者である私はまたちがいますから、ちがう角度からまた意味づけるでしょう。

ですから意味というものは決してここに「ある」というものではない。意味づける。「意味付与」といいます。ですからAはAの立場で、BはBの立場で、CはCの立場で意味を付与する。というふうに考えてください。

ですから、たとえば紫式部は紫式部自身の意図をもって『源氏物語』を書いたでしょうが、現代の読者である私たちは作者の意図はさておき、そもそも作者の意図なんてのは勘ぐる以外にないわけですから、私たちは私たちなりの観点から意味づける。

その意味づけというのは自分のためにするんですよ。他人のためじゃないし作者のためでもない。自分にとって意味のあるように、自分で意味づければいいのです。小説でも詩でも、それを自分自身がどう受け止めるかということなのです。

いろんな解説書が出ていますが、それを読んで「あ、この詩はこういうふうに読むんだ」と受け取らないで「あ、こういう読み方もあるんだ、こういう意味づけかたもあるんだ、なるほど」というふうに受け止めて、「しかし私はこういう角度から自分なりに意味づけてみよう」というふうにしていただきたいと思います。それが詩の読み方だし、また絵の見方でもあると思います。もちろん、すぐれた人の見方というのは大変参考になります。「ここまで深く意味づけることができるんだなあ」と。それを見習って自分なりに深く意味づけてみるということになろうかと思います。

この「手」という詩は、幼い子供のこういう姿に思わずもらい泣きするというふうに素朴に読んでもいいんですけども、できれば今言いましたように自分にとってはどういうふうに意味づけられるかということを考えてみていただくといいと思います。

「すすき」

今度は「すすき」という、先ほどの工藤直子さんの詩です。

すすき　　工藤直子

すすきが
しんしんと　のびて
秋になると

あそこ…あそこ…
あそこ…と

すすきは
風のゆくえを指さす

すすきの指にさそわれて
人々は　頭をめぐらせ
ついに　おおきな空をみつける

こういう詩ですが、みなさん、お隣の人と自分たちなりに意味づけをしてみてください。私はこの詩をこんなふうに意味づけしてみたい、こんなふうに読んでみたいということをおしゃべりしてみてください。私だけがしゃべっていると、みなさんの楽しみをうばうようなものですから、せめて一つぐらいは自分なりに読むということがあっていいと思います。

〈すすきが〉〈のびて〉〈秋になる〉のですよ。ふつうだと、秋になってすすきがのびると言うんじゃないでしょうかね。

最初から空を見ているんじゃないでしょうかね。ここで、やっと〈空〉をみつけたんでしょうかね。

最初に言いましたように正解があるわけじゃないですからね。算数の計算みたいに答えが決まっているわけじゃないですから気楽にやってみてください。こんなふうに読むとおもしろいなあ、こういうふうに読むとわかるなあというふうに。これは、考えてみると入試問題にはならないですね。

どなたか、どうですか。お隣の方がとてもおもしろいことを言っていたという方はありませんか。なんか急にひっそりと（笑）なりましたが。

たっちゃん、どう？はい、これから中学生のたっちゃんが発表します。

龍弥　〈すすき〉のイメージが、〈あそこ・・・あそこ・・・〉と書いてあるんですけど、そこが、子供が指さしているような感じがしました。（西郷　なるほど。）で、大人たちは、それにつられて見て（西郷　（笑）中学生が大人に言うようにですね。）それで、最後に〈おおきな空をみつける〉。（西郷　大人が子供に教えられたんだ。）そう。（笑）

西郷　では、君が言ってほしい人にマイクを回して。はい、今度は元中学生。（笑）今高校の英語の先生。

教江　最後に出て来る〈おおきな空〉というところに向かってイメージがふくらんでいっていると思うんですけど、ふだん何気なく見ている空と、ここで見ている〈空〉は同じなんだけどもちがう。

西郷　うん。ふだんは何気なく見ているのね。それがどうして今日はちがうんでしょう

ね。どうしてふだんとちがった見方になっているのでしょう。

教江　勝手に目に入ってくる景色じゃなくて・・・まとまらないんですけど。

西郷　まとめなくていい。まとめは私がするから。（笑）〈すすき〉にいざなわれて行くのですね。

教江　それで心がおどっているような感じがして・・・

西郷　ずうっと〈すすき〉にいざなわれて行った末に目をやって〈ついに　おおきな空〉と言っていますね。どういう意味で〈おおきな空〉と言ったんでしょうね。

教江　一体感が、自分との。

西郷　ああ、自分と一体になった空。それを〈おおきな〉と言っている。はい、いいでしょう。高校の授業で子供に発問をして、子供が当てられて答える時の気持ちがよくわかったでしょう。（笑）時には生徒の立場に立って、生徒の気持ちになるのはいいことです、教師として。はい、マイクをこちらへ返して。（教江　当てていいですか。）（笑）あ、当てたいの？どうぞ、もう一人。

睦美　私は、〈すすき〉が〈風〉になびく様は、意思を持ってするのではなくて、〈風〉に吹かれた方へなびいて、その先を人が、あっちにこっちに追って行って〈頭をめぐらせ〉というところで、いろんな方向を見ている間に自分の中で、ああ〈ついに　おおきな空〉を見つけたという感動をおぼえたのではないかと思ったのですが。

西郷　なるほど。突然のことで申し訳なかったです。最初に言いましたように、意味というのは、それこそ早く言えばまか不思議なもので、あるわけじゃないです、生みだすものです。人が作るんです。そこに人が生みだす。意味づけです。意味付与です。それには、こちらが、そのものと向かい合ってその中に深く入り込んでいくということをしなくちゃいけません。

この「すすき」という詩もいろいろな意味づけ方があろうかと思うんですが、さっき、たっちゃんがやっていたのは、私は聞いていてひじょうに、中学生であるたっちゃんの意味づけが教師である私の胸に突き刺さる感じがしました。どういうことかというと、〈すすき〉は無心に〈風〉に吹かれてなびいているわけです。自分で意志的に生きているわけではない。

ものと時間

その前にちょっとこの書き方に注目してほしいと思います。〈すすきが／しんしんとのびて／秋になると〉というこの言い方が、ふつうですと「秋になってすすきがしんしんとのびて」と言う言い方になると思うんです。このへんのとらえ方自体がまず通俗じゃないと思います。

私はふっと道元禅師のことばを思い出します。どういうことかというと、難しいことば

ですが、わかりやすく言うと、私たちは「春になったから花が咲く」、春という時、春という時間が来たから花が咲くというふうに「時間」を先にして言う。それを道元禅師は逆にひっくり返して「花が咲く時」つまり今までつぼみだったのが開くという、「もの」の変化ですね、その「花が開く時を春と言うのだ」というような言い方をしているのです。

この「時間」と「もの」についての考え方というのがたいへんユニークで、現在の最先端を行く考え方にもつながってくるところがあるんですね。もちろん工藤さんはそういうことと結びつけて書いたわけではないでしょう。詩人の発想としてこういう発想になってきていると思います。

〈すすきが／しんしんと　のびて／秋になると〉〈あそこ・・・あそこ・・・／あそこ・・・と／すすきは風のゆくえを指さす〉ふつうだと「風がふいて、その風にすすきがなびく姿」であるわけなんですけども、そういうふうにはとらえていない。むしろ〈すすき〉の方が〈風のゆくえを指さ〉しているというふうに、ある意味では擬人化して、ということは、〈すすき〉に意思、心というものを見ている。そして〈すすき〉が指さす〈風のゆくえ〉に人間の私がさそわれて、そこではじめて本当に「あ、空というものがここにある」というふうに〈空〉の存在にハッと気づかされるということになる。

要するに自然の中のとりとめのない、他愛のないちょっとした現象ですね、できごとですね。そこから大自然の奥にひそんでいる何かにハッと気づかされるという、そんな思いをいだかせる詩かなあと思います。こういうふうに私は考えてみました。ある意味でたいへん哲学的な詩という気がします。

私たちは日常的には空を見ていて、空というのはこういうものだとわかっているつもりになっている。その日常の中でも手垢にまみれているような事柄、そういうことを新鮮なかたちでハッと見直させる。そういうきっかけになる詩かなあと思います。

助詞「の」と「を」

さて、一通り詩を使ってお話してきたんですが、みなさんにお配りしたチラシの中に蕪村の句を一つ上げておきました。これを見てください。

五月雨や大河を前に家二軒　　与謝蕪村

この〈を〉という助詞を〈の〉という助詞にかえるとどうなるかということです。歌の世界では昔から「てにはの論」という歌論があります。歌の道を論じた理論を歌論といいますけども、「てにはの論」はその典型的なものです。歌というのはなにしろ三十一文字で短いものです。短い文の中で「てにをは」というのは、ひじょうに大きな比重をもちます。なぜかというと、日本語というものの特質から「てにをは」というものはひじょうにだい

じな役割をもっているのです。言葉と言葉の関係をあらわす言葉なのです。

ということは、ものごとともものごとの関係をピシッと決める。「私は〇〇を」というばあいと「私が〇〇を」というばあいと「私も〇〇を」というばあいはガラッとちがう。ですから「てにをは」一つで歌が生きもするし死にもする。「てにをは」一つが死命を制する。

そういう理論を「てには論」というんですが、俳句の十七文字の中で、たったの一字とはいえ、それによって句は決定的にちがってきます。そのことをお話しします。実はこれは私が『名句の美学』という本に書いてあることなんですけども、かいつまんで。

「〇〇の前に」と「〇〇を前に」とはどういうちがいがあるのかということです。わかりやすい例で言いますと、息子が「父親の前にあぐらをかいた」とか、「父親の前に座った」とかいう時の「の」は、その父親と息子の空間的な位置関係を表すだけなんです。ところが「父親を前に座った」というのは、父親に対して対峙して座る、何かこれから切りだして、何か言おうとする決意のような、意思のようなものが感じられます。

それから「この手紙は死の前に書かれた」というと、ただ死の直前という時間的な関係をまずは表しています。「この手紙は死を前にして書かれた」というと、死というものと対峙して、そこで何か言うべきことがあって、これだけは言っておきたいということで書いたというふうな、決心とか決意とかいうようなものを感じますね。

そういうふうに単に空間的あるいは時間的な前後関係を表すだけじゃなくて意志的なものまで感じさせるのが「〇〇を前に」という「を」の使い方です。

意味づけながらイメージを作る

そうするとこの〈五月雨や大河をまえに家二軒〉という句ですが、まずイメージを作っていくということがだいじです。詩も物語もすべてです。イメージをゆたかに読むことです。〈五月雨〉というのは長雨ですね。長々と降り続く雨です。その〈五月雨〉を受けると〈大河〉は、ただ大きい河というのではなくてと濁流渦巻く大河というイメージになります。これがだいじなことです。イメージをふくらませていくというのは、ただ事柄がわかるだけではダメです。〈五月雨〉というと長々と降り続いて、昔も今もそうですが洪水が起きると大洪水になります。堤防が決壊したり橋が流されたり大変です。そうすると、この〈大河〉というのはゆうゆうと流れるのどかな大河というイメージではなくて、〈五月雨〉との関係で、〈五月雨〉を受けて、濁流が渦巻きながら流れるおそろしい、自然の猛威を感じさせられる〈大河〉のイメージになります。

その〈大河を前に〉して〈家二軒〉。これは「家一軒」とちがいます。「家十軒」とか「家百軒」ともちがう。ほかならぬ〈家二軒〉である。この「ほかならぬ」というふうにとらえてほしいと思います。そうすると、「家一軒」だとあまりにもわびしくたよりない

ですね。濁流渦巻く大河の前に家が一軒だけあるというのは、何か危機感あるいは孤独感、わびしさが感じられますね。

〈家二軒〉というとどうですか。この〈家二軒〉は離れているイメージですか、くっついて肩を寄せ合っているイメージですか。離れている感じはしないでしょう。なぜかというと、〈大河〉というイメージがあって、〈家〉のイメージがあると、実際は百メートル離れていても、〈大河〉のイメージとの対比でくっついて見えるんですよ。つまり肩を寄せ合っているイメージです。

そして〈家〉というのは「松」とちがいます。〈家〉というのは、そこに人間の暮らしというものを想像させる。だから〈家二軒〉というと、単に建物が二つあるというのではなくて、人間が暮らしている、人間が肩を寄せ合っているというイメージがうかびます。

これはつまり、意味づけながらイメージを作っているわけですよ。

そうすると、自然の猛威の前に、ひっそりとではあるが家が二軒、肩を寄せ合って、その大河を前にして、向かい合って、対峙しているというふうなイメージということになります。

芸術家と社会

この蕪村という人は、よく絵も描くものですから、よく「蕪村の句は絵のようだ」と言われます。俳句のことについて書いてある本をよく読まれる方はおわかりと思いますが、この句を今私が言ったように解釈している例は一つもないんです。「墨絵に描いた、一つの俳画ような世界」という解釈しかない。ただ絵にしている。ただ絵にしているというのは、意味づけが抜きになっているんですね。

じゃあ、なぜこういう解釈が出てくるのかというと、私は『名句の美学』に描いたんですけども、これは自然の猛威ではあるけれども、自然の力だけではない。人為的なものです。つまり社会、歴史というものが人間におそいかかってくる。そういう歴史の流れというものを前にしてひっそりと方を寄せ合ってたたずむ人間の連帯の姿。こういうふうにとらえたのです。

ま、「それは深読みだ」とか「読み過ぎだ」とか言う人もあると思うんですが、それを裏付ける、つまり傍証ですが、事実があるのです。それはどういうことかというと、時あたかも安永の、浅間山が噴火したり、大飢饉があったりして江戸市中打ち壊しがおこった。打ち壊しというのは、大きな米俵や材木や大きな石を載せて引く大八車みたいな車、地車と言うんですが、そういうものを押して米倉にドーン、ドーンと当てて壊すんです。そして中の米を持ち出して配る市中打ち壊しという騒動がありました。ま、米騒動みたいなものです。世の中はそういうものすごい状態の時なのです。そういう時に蕪村は江戸に住んでいて、こういう句をつくりました。

地車のとどろとひびく牡丹かな　　与謝蕪村

これは何を言っているかというと、市中打ち壊しの時の〈地車〉です。そして〈牡丹〉ですが、牡丹が咲いている屋敷というのは、今はそのへんの家でも牡丹が咲いていますけども、江戸時代には富貴な家でした。〈牡丹〉は富貴の象徴なんです。要するにお屋敷なのです。食うに食えない庶民が米を求めて〈地車〉を押して市中打ち壊しをしている。一種の「革命」ですよね。そしてそれに揺すぶられているお屋敷の〈牡丹〉のイメージなのです。単に牡丹の花を歌っているのではない。〈牡丹〉は意味をもっているのです。いや、持たしているのです。〈地車〉はわかりますね。〈とどろとひびく〉はその通りです。〈牡丹〉というのは象徴性を持っているわけです。まさに富の象徴、富貴の象徴とされる〈牡丹〉が揺すぶられている。そういう状況を詠んでいる句です。

月天心貧しき町を通りけり　　与謝蕪村

とか、蕪村という人は決して絵のような風景を描いた俳人なんて、そんな解釈ですませてはいけないのです。「時代の人」ですから、時代を敏感に感じとっているのは芸術家なんです。

9・11でアメリカ社会はゆすぶられたでしょう。ちょうどあのようなものです。あの中で生きている芸術家だったら無関心ではおれないでしょう。芸術家というのはひじょうに感受性の強い人間ですから、社会のそういう空気というのは敏感に感じとっていると思います。

そういうものが句のうえにも反映してくるわけです。だとすると、これをただ絵に描いたような侘び寂びの世界というようなふうに読んではダメです。

やはり自分にとって意味のあるような読み方をしなくちゃいけないと思います。

美

さて、次の俳句ですが、私なりの読みをしてみたいと思います。意味づけとか何とかということからはちょっと離れるかもしれませんが。

金剛の露ひとつぶや石の上　　川端茅舎

〈金剛〉というのはダイヤモンドのことですが、仏教に「金剛経」というのがありまして、そのばあいの「金剛」は硬いとか永遠なる真理とかいう意味をもっています。

ところで俳句というのは頭から読んでほしいと思います。下の方から読まないでください。〈金剛の〉とあって、そこでイメージを作る。そうすると硬い、ダイヤモンドを思い出してもらえばいいですが、そういう硬いイメージと〈露〉。〈金剛の露〉というのは実に大胆な表現だと思います。ふつう露というのははかないものです。朝露なんてのはお昼にはもう消えて無いでしょう。「露の命」といいますね、若くして亡くなったという意味で。はかなさが露の代名詞ですよね。その露を〈金剛の露〉と言うでしょう。ハッとさせられます。これを「仕掛」といいます。仕掛というのは、読者が思わずハッとして引き込まれる働きです。思わず立ち上がる感じですね。そしてもう一度見直す。まてよ、なんで〈金剛の露〉なんだ？と。

そして〈金剛の露ひとつぶや〉ときて〈石の上〉とくるでしょう。ここでおどろかないとダメですよ。（笑）どうしてかというと、どうして〈石の上〉だと〈金剛の露〉になるのか。そこで露というものを頭に描いてほしいんです。露というのはたいてい緑の葉っぱの上にあるか赤い花びらの上にあるかしますね。そうすると、露というのは自分の色を持たない。周りの色を映す。赤い花びらの上だと赤い色をしているし、緑の葉っぱの上だと緑の色をしている。要するに自分がいる「場」のイメージを自分のものにしている、これが露なんですね。とすると〈石の上〉の露は石のイメージを我が物としている。そういうふうに読むと、〈石の上〉の〈露〉が〈金剛の〉というイメージとして見えてくるかなあ、と。

茅舎という人はひじょうに仏典にくわしい人で、そういう句が他にもいろいろあります。

最後に山口誓子の句です。

冬河に新聞全紙浸り浮く　　山口誓子

〈新聞全紙〉というのは、新聞まるまる全部ですね。この「まえがき」か何かにあるんですが、あるところでちょっと見ていたら、凍りつかんばかりの冬の河で、新聞紙が一枚浮いていた。こういうのを「触目の句」というんですが、実際に目にした実景をもとにしてものした句だと作者が書いているんですけども、それはいいんですが、これをたとえばどういうふうに読んだらおもしろいか。

つまり俳句というのは、おもしろく読むということなんです。おもしろく読むというのは、むつかしい言葉で「美」というんですけども、「美」というのはきれいという意味ではなくて、味わいとか趣きとかいうことで、味わいとか趣とかいうのは、異質なものが一つに溶け合っている、アウフヘーベンというんですけど、さっきの金剛、ダイヤモンドのようなものとはかない露のようなものが一体化して〈金剛の露〉となりますね。これが私

の言う「美の構造」です。

〈冬河〉というのは、凍りつくような寒さですね。そこに〈新聞全紙〉が浮いている。では新聞とは何か。ほかならぬ新聞です。新聞とは何でしょう。今ですと道路公団総裁が辞任するとかしないとかでワンワンやっていることが新聞に出ている。あるいは、行方不明の誰かが死体となって発見されたとか、借金で首をくくったとか、イラクで何人殺されたとか、ホットな話題がいっぱいあるのが新聞です。そういう火の出るようなホットな話とか清濁併せ持つような話題とかが満載されている〈新聞全紙〉なんです。

それが〈冬河〉に凍りつくような形で浮いているという、このイメージの衝突と言いますか、このへんがおもしろいなあと思います。

こんなところで終わりにします。今夜は堅い話で恐縮ですが、ま、たまにはこういう話もよろしいんじゃないでしょうか。お足元に気をつけてお帰り下さい。（笑・拍手）